

2021

令和3年4月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻332号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

4

とあお



さわやか福祉財団

コロナ禍を乗り越えて、
地域共生社会実現に向け、一緒に前に進みましょう！

いきがい・助け合い サミット in 神奈川

5月中旬 参加お申し込み開始

ふるってご参加ください！

開催

2021年 **9月1日**(水)・**2日**(木)

場所

パシフィコ横浜 (横浜市西区みなとみらい1-1-1)

開催
形式

会場参加、ライブ配信併用

会場参加 **1500名** オンライン視聴 **3500名**

※新型コロナウイルス感染症の状況により、全面オンライン配信とする場合があります。

主な
内容

- 全体シンポジウム
- 分科会：第1部から第3部まで34分科会
- ポスターセッション ※現時点での予定です
- 全体発表会 など

ポスターセッション4月26日出展受付開始

コロナ禍における助け合い活動、地域共生の活動など、
いきがい・助け合い活動に関する取り組みを
ポスターにしてご紹介ください。

全国自治体からのご応募をお待ちしています！

【お問い合わせ】 電話：(03) 5470-7751 (担当・内田)

◎開催情報は、財団ホームページ
でもご案内しています

▶ <https://www.sawayakazaidan.or.jp>

とあ言おう

2021年4月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

新年度に寄せて 創立30周年を迎えます 清水 肇子

さわやか福祉財団の軌跡

4 真っ直ぐに、30年 堀田 力

6 寄稿 堀田さんのこと 一さわやか福祉財団の草創期とその後を中心に—
(元検事・公証人) 弁護士 清水 勇男

14 連載 今風女子93歳

どんな役割も受け止め、応えてきたから「今」がある
大川 繁子さん

22 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

地域の将来像を共有し、
自治会という小単位で身近につながり助け合う
不動ヶ丘高齢者等生活支援プロジェクト ほっとらいふ (大阪府富田林市)

28 移住 悪くないですよ 第5回

「半農半X」で生きる 京田 貴央さん・甘奈さん (岡山県新見市)

34 連載 3 老いの暮らしを創る

老後、誰とどこで過ごしますか 福祉ジャーナリスト 村田 幸子

新しいふれあい社会づくりに向けて

- 新地域支援事業・
助け合いの地域づくり 42 北から南から 各地の動き
- その他の財団の活動 など
46 ご支援ありがとうございます。
さわやかパートナー (賛助会員)・ご寄付者の皆様のご紹介
48 さわやか活動日記 (抄)

①『さあ、言おう』バックナンバーのご紹介／②「地域助け合い基金」状況のご報告／③「基金」寄付のご案内／④「基金」助成先のご紹介／⑤『さあ、やろう』vol.15のご紹介／⑥助け合い大全'19のご紹介／⑦2021年度 実施事業・プロジェクトの紹介／⑧みんなの広場 / 投稿募集 / ⑨さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう! 新・ひとりごと・坂本 昭文

新年度に寄せて 創立30周年を迎えます

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

1991年11月、さわやか福祉財団は、さわやか福祉推進センターとして誕生した。

東京・渋谷の古いマンションの一室、お金の当てなどまったくなく、親しい仲間同士が集まったわけでもない。ただ、このままではいけない、もっとあったかい地域を、もっと皆がふれあい、助け合いながらいきいきと暮らせる社会を、と、大きな大きな夢を持った一本の幹に、一人、また一人と、思いを共にする人々が集まってきた。

それから30年。この秋に、財団は、創立30周年を迎えます。本当に多くの皆様のご支援を得て、今日の活動につなげることができました。心から感謝申し上げます。

* * *

4月は多くの組織で新年度を迎える時期。当財団も同様だが、今年は少しだけ例年と趣が異なる。秋には、「いきがい・助け合いサミットin神奈川」に加え、全国交流フォーラムに30周

年の冠を付けて11月に実施することを予定している。

実は財団は、任意団体から財団法人化したときこそ記念パーティを催したが、以後周年行事を行ったことがない。日頃から支えていただいている皆様に感謝の場を持つことは非常に大切なことと思いつつ、それは毎年の交流フォーラムや、事業と社会への成果でお返ししようという思いで、常に皆で走り続けてきた。20周年は東日本大震災の時期と重なり、お祝いどころではなく、まさに活動で何とか少しでもお返しをしなければという思いでいっぱいだった。

今回の30周年も一つの通過点であることに変わりはない。ただし、この2年間、コロナ禍により、ご支援者の皆様にお集まりいただく交流フォーラムを通常通り実施することができなかったことを踏まえて、30周年の御礼と合わせた形で実施させていただくこととした。

そしてもうひとつ。30周年の冠を付ける重要な目的がある。この30年で大きく社会環境や構造が変わる中で「地域力」が不可欠の要素となり、さらに、その中でも、住民主体の助け合い、互助・共助の普及が特に重要になっている。「会社」主義から脱皮して「社会」がキーワードになり、「組織」から「個人」へ、「物」から「こころ」を意識することが主流となった。

そして今、「地域共生社会」が謳われ、「誰一人取り残さない、一人ひとりの尊厳ある暮らし」が大命題となっている。変わらずに持ち続けるべき助け合いの原点と、時流に合わせて変えていくべき取り組みを見誤らないように。皆で再確認しながら、さらに次に向けて羽ばたけるための1年としていきたい。

今年度もご支援をなにとぞよろしく願います。

真っ直ぐに、30年

公益財団法人さわやか福祉財団 会長 堀田 力



財団も、もう30年になるのですね。

あっといふ間のようでいて、こんなに長い30年は、歴史の上でもなかったかと思えます。何といっても、暮らしが信じられないほど便利になりました。

蛇口をひねれば温水が出るのは当たり前、トイレはウォッシュレット、たいいていの生活必需品は夜中でもコンビニで買えます。新幹線で全国日帰り可能、宅配で弁当一つ、本一冊、日曜でも自宅に届きます。医療も介護も、皆保険。

科学技術の超急速な進展と、情報・金融など経済・社会システムのグローバルな発展によって、私たちの生活は、発展の裏で犠牲を強いられている南半球の極貧の人々から見れば夢としか思えないような、ぜいたくなものとなりました。

*

*

*

では、私たちは、夢のように幸せになっているのでしょうか。

なっていないでしょう。百倍高い値段の食事をして、百倍幸せになることはない。や

っと入手できたチャリティのパンを分かち合って食べる人の方が幸せです。私たちは物の豊かさ、便利さにはすぐ慣れてしまっただけで、それが当たり前と感ぜるようになってしまっています。財団は、設立以来ずっと、「生活に必要な限度以上に物があっても、幸せにはならない」と言ってきました。

日本より経済的にはずっと貧しいブータンの人々の輝くような笑顔からわかるように、人は人とふれあい、自分らしく生きる時、最高に幸せなのです。財団は30年間、新しいふれあい社会を目指して、真っ直ぐに進んできました。

*

*

*

この30年、日本の少子高齢化も、空前絶後のスピードで進みました。そのため、高齢者を支えるためのお金も、働き手も、決定的に足りなくなっています。もはやこれまでの経済システムでも公的保障のシステムでも、弱い社会的立場に置かれた高齢者や、経済のグローバル化によって大量に生まれた格差社会の犠牲者たちを救うことはできない段階に入っています。

だからこそ、これまで以上に私たちは、財団が主張してきた「すべての人の尊厳を大切に、ふれあい、支え合い、自分を活かして生きる社会」を、みんなの力を合わせて新たにつくる必要があります。

財団の強力な支援者清水勇男さんが寄せてくださった原稿を皮切りに、財団の軌跡を、人中心に辿りたいと思います。

真っ直ぐに、30年

寄稿

堀田さんのこと

—さわやか福祉財団の草創期とその後を中心に—

(元検事・公証人) 弁護士 清水 勇男

栄光に未練なし

同じ釜の飯を食った仲間は懐かしい。

ロッキード事件の第一審公判を苦勞して担当した数名の仲間は、事件が終わった後も何かと理屈をつけて集まっては飲み会を開いていた。

平成3（1991）年の9月初め、まだ暑いころだったと思う。堀田力さんを筆頭にいつものメンバーで馴染みの寿司屋「満平」に集まった。宴たけなわのころ、当時法務省官

房長だった堀田さんが、まだ公表していないのだが、という前置きで

「実は、近く退職することになった」と言った。

私は「えー！」と絶句し、その場の仲間も一瞬押し黙った。ロッキード事件が発覚したのは昭和51（1976）年に入ってからのことと、2月5日の各紙夕刊1面トップにロッキード社がその開発した旅客機トライスターを売り込むため世界各地の関係先にワイロをばらまいた、日本政府にも巨額のワイロが流

れた、との記事が大きく載った。特捜部にとつては寝耳に水のことであった。贈賄側の被疑者は全員アメリカに居住、重要証拠はすべてアメリカ側にあるという特異な事件で、どこから手を付けたらいいのか判らないような状況であった。そんなとき天の配剤というか救いの神として現れたのが堀田さんだった。

当時、堀田さんはワシントンの日本大使館一等書記官勤務を終え法務省刑事局に参事官として勤務しておられたのだが、ロッキード事件発覚後まもなく東京地検特捜部に急遽配置換えとなり、以後この事件に長く専従することになった。

堀田さんは、在日本大使館勤務当時に培ったアメリカ司法省との人脈等をフルに活用し、事件に関わる重要証拠の提供を受けるとともに、アメリカの裁判所でロッキード社のコーチャン社長やクッター日本支社長など贈賄側の重要人物の嘱託証人尋問に立ち会い、日

本国内で第一審公判が開始されるや公判活動に専従するなど、八面六臂の活躍をされた。ロッキード事件は、堀田さんを抜きにして語ることはできない。

官房長というのは、官房3課、すなわち人事課、総務課、会計課を統括する役職であり、いずれは東京高検検事長を経て検事総長に推挙される至近の地位にある。その官房長の地位を捨てて退職するという。一体何があったのか。堀田さんは「福祉の世界へ進みたい」と言った。

頭のいい人は時に訳の分からないことを言い出すものだ。福祉などという混沌としていて筋道もないような世界に、将来の栄光を捨ててまで進みたいというのはどういう訳か、何か検察に不満があるのか。仲間は口々に詰問した。

堀田さんは、検察には自分を育ててくれた恩こそあれ、不平不満など全くない、ただ法

務・検察の世界で自分でなければやれないと思える仕事がもうなくなってしまうた、私は捜査検事として難事件に取り組み解決することが無上の生き甲斐だったが、これからの私にはそういう機会はない、ただ世の中に起こるさまざまな難題に出合うと自分が何とか力になれないものかという気持ちになる、思うに今の日本では少子高齢化に伴って累積する高齢者の増加に福祉行政がついて行けず、放置すれば財政が破綻し、国がもたない、この難題を解決するにはどうしたらいいのか、私なりにずっと考えてきたが、結論として全国各地にボランティア団体を立ち上げ、その団体が核となって地域の高齢者を支えるという方策がある、人間には本来人の役に立ちたいというDNAがあり、これがボランティアの原点だとすれば、やがて自分たちも間違いなく仲間入りすることになる高齢社会の問題に無関心でいられるはずがない、問題は前向き

1997年(平成9年)5月2日(金曜日) 夕刊 読売新聞

「100人ボランティア」 堀田 力さんと考える
 ●ボランティアの可能性

善い行いは 皆で褒めた方が 人間らしい

介護、社会全体で支える仕組みを





「100人ボランティア」は、東京都港区のボランティア団体「100人ボランティア」の活動を紹介する記事。記事は、ボランティア活動の重要性と、社会全体で支える仕組みの必要性を説き、ボランティア活動の活性化を促している。

(平成9年5月2日付 読売新聞夕刊)

堀田 力 (東京大学)

風貌 97
 純な気持ちで突っ走る



「純な気持ちで突っ走る」という言葉が、堀田氏の活動の核をなしている。記事は、彼のリーダーシップと、社会貢献への情熱を伝えている。

(平成9年8月18日付 日本経済新聞夕刊)

なボランティアをいかに多く集め、互助・共助の旗の下に結集させることができるかであり、これからの私の人生はそこに賭けたい、という話を熱心に語った。

志が呼び寄せた支援者、同志たち

しかし、それは判ったが、なぜ堀田さんがその役目を引き受けなければならぬのか、それに相応しい専門家なり有識者なり大勢いるのではないか、という厳しい意見があった。それに地方にボランティア組織を立ち上げると言っても資金が必要なわけだがその資金をどうするのかという質問に対して、自分は借家住まいをして退職金をすべてその資金に充てるという答えであり、また、有力なスポンサーの目当てはあるのかという質問に対して、現在はないがいずれ現れてくるだろうとの答えであって、それは甘すぎるというのが

その場の意見だった。みんな堀田さんに檢察を去って欲しくないという気持ちだったのだ。私は帰り際の堀田さんをそっと呼び止め、いづれ近い将来、検事総長のイスを競い合うことになるだろうと思われる検事の名前を挙げて、その人にイスを譲るために身を引こうとしていたのではないかと尋ねたところ「ボクはそういうレベルで自分の進退を考えたことはない」と言われ、私は次元の低い質問をしてしまったと赤面した。

その年の11月3日、堀田さんは法務省官房長を最後に57歳で退職した。

ひっそりと去っていききたいという堀田さんの思いに反して各紙はこの退職を大きく報道した。将来を約束された高官の地位を捨てて福祉の道に転身したいという退職理由の意外性に強く反応した結果だと思われる。この記事が実は大きな呼び水の役割を果たした。

堀田さんは多摩地区に借家を求めて転居し、

渋谷に事務所を借りて「さわやか福祉推進センター」と「さわやか法律事務所」の2枚看板を掲げた。法律事務所の方は同じ時期に法務省を退職した田島優子弁護士に任せ、堀田さんは福祉事業に専従することになった。退職の記事を読んだ著名な団体の長や幹部たちがセンターを次々と訪れて支援を申し出てくれた。

その中に元サッカー選手で東京オリンピック代表として出場したこともあるJリーグ初代チェアマン（代表理事）川淵三郎氏がいた。私も存じ上げているが、いかにもスポーツマンらしい精悍な感じの方である。堀田さんはJリーグのことはよく知らなかったらしいが、川淵氏からサッカーのチーム名に企業名ではなく地域名を入れたのは地域を元気にしたいという気持ちからであり、それによって地域とチームが地域愛を絆に結ばれて盛り上がり、地域の活性化につながると考えたという話を

聞き、それは自分たちが地域にボランティア団体を創出しようとしていることと基本は同じだと感動し、意気投合した。Jリーグは以来、さわやか福祉財団のよき支援者であり続けている。

さわやか福祉推進センターはやがて任意団体から公益財団法人さわやか福祉財団となり、事務所は渋谷からいくつかの変遷を経て現在の日本女子会館に落ち着いた。堀田さんが旗揚げしてまもなくのころ、外資系銀行の元次



「夢は新しい地域コミュニティづくり」誌上対談当時の様子
(1994年『さあ、言おう』9月号掲載)

長でフリーでキャリアコンサルタントとして
独立し、他に個人でも、21世紀の新たな社会
づくりに挑戦する若手異業種勉強会の事務局
長をしていた若き清水肇子さんが堀田さんの
設立趣旨に共鳴して馳せ参じた。まだ海の物
とも山の物ともわからないような組織へよく
参加してくれたもんだと当時は哑然としたも
のだが、さわやか福祉財団の躍進に大きな力
を発揮することになった。今や財団の理事長
として堀田さんの後継者となっている。

困難克服の歴史 新しいふれあい社会への道

堀田さんが「新しいふれあい社会の創造」
を旗印にして「みんなが安心して老いていけ
るような制度をつくり、年をとることがこわ
くない地域社会をつくりたい」という目標を
もって福祉の世界に進んでいった原点には、

アメリカの日本大使館一等書記官として外交
官勤務をしていた当時、初めての外国暮らし
で不安だった家族に家の近所の人たちが身内
のように温かく接してくれたお陰でみんな安
心して楽しく暮らすことができたという実体
験があり、日本の町内にも昔あったような気
楽で楽しい社会をつくれないうものかと思っ
たことが堀田さんの原点であった。

堀田さんが退職して福祉の道に進み始めた
平成3年はバブル崩壊が始まった年で、その
後もリーマンショック、サブプライム危機と
経済危機が続き、阪神・淡路大震災（平成7
年）、東日本大震災（平成23年）と、日本列
島は激震にも襲われた。財団はこうした激動
の時代にもたくましく生き抜いてきた。これ
まで財団が新規設立を支援した地域ボランテ
ィア団体数はすでに1000を超え、これら
の団体を結ぶ情報誌『さあ、言おう』に加え
て『さあ、やろう』も発行部数を伸ばし、内

容も充実している。こうした援助資金や広報資金など財団としての活動資金は会費と有志からの寄付によって賄っているが、交通遺児の育英資金などと違って目標に具体性が乏しいことから一般に浸透しにくい面があり、それが寄付の広がりを妨げているように思える。

振り返ると、財団の行く手にはさまざまな困難が待ち伏せていた。私のレベルで言うと、例えばボランティア切符は時間預託、すなわちボランティアとして活動した時間をその団体に預けておいて将来本人や家族に援助が必要となったときは団体からその時間分の援助が受けられるという仕組みであるが、その信頼性をどこまで確保できるかなどの問題もあって広がっていない。

またボランティアの人材供給源として中高年層に期待し熱心に働きかけているが、なかなか集まらず、笛吹けど踊らずの状態が続いている。自分と家族の生活に手一杯で余裕が

ないというのが偽らざるところであろう。

加えて最近の新型コロナウイルス旋風である。なるべく外出せず、3密を避けるという風潮が定着すると、人と人との温かい交流が不可欠なふれあい社会の創造という目標と実践はどうなるのか。

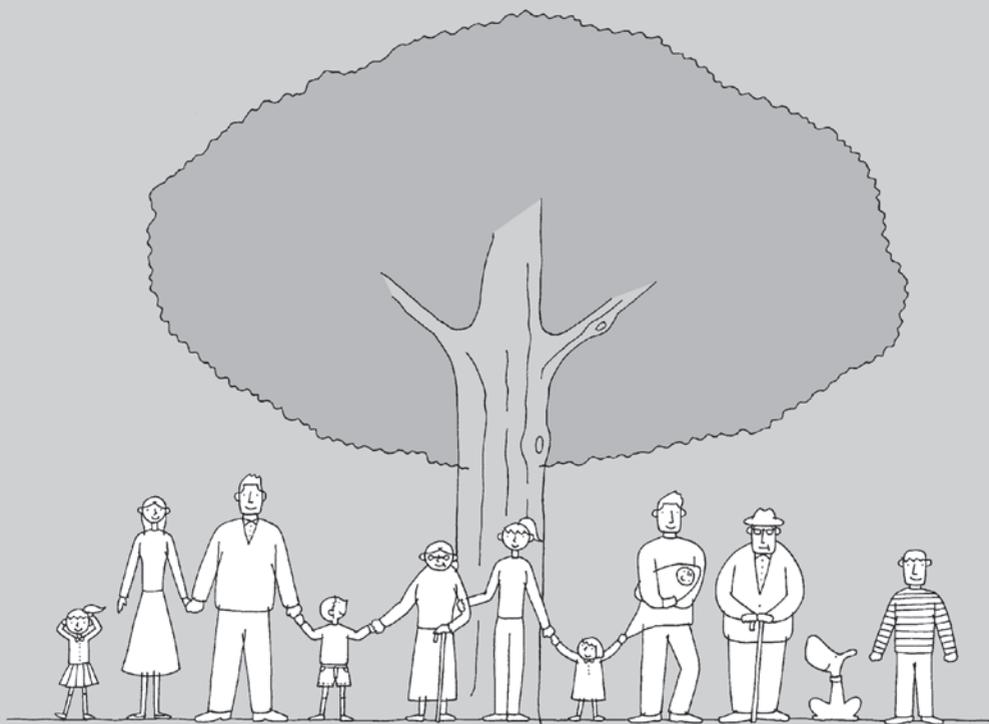
しかし、さわやか福祉財団はこれまで多くの困難を克服してきた。さてこれからどうするのか。我々OBを含めて周囲は固唾を呑んで見守っている。大変な時代に遭遇してしまっただが、財団はこれまでの蓄積された膨大な経験と英知を結集して力強く前進していくものと期待し、切望しているのである。



第2回「さわやか交流会」にて、参加者の皆さんと（1995年）

新しいふれあい社会づくりに向けて30年

これまでのご支援に 心より感謝申し上げます



新しいふれあい社会



公益財団法人

さわやか福祉財団

今風女子93歳

どんな役割も受け止め、
応えてきたから「今」がある

大川 繁子さん

結婚まで、お米をといたこともない「お嬢さん」だった大川繁子さん。20歳で栃木・足利の地主本家に嫁いだ後は、大所帯の家事や育児、介護を担い、義母が開設した保育園「小俣幼児生活団」で93歳となった今も主任保育士を務める。嫁として、そして保育士として過ごしてきた日々についてうかがった。

(聞き手/宮下 公美子)



次男の大川眞園長（左）と繁子さん（右）

20歳で栃木の地主本家の嫁に
つらいと思う暇もない日々

昭和2年に東京・三田で生まれた大川繁子さ

んは、6歳の時に父を病気で亡くしている。しかし、都内有数の看護婦・助産婦派遣会社（当時）を経営する祖母のおかげで、経済的には恵まれていた。子ども時代のことをたずねると、

3歳の頃、母に連れられて日比谷公会堂で石井漢氏の舞台を見たときのことを話してくれた。

「漢先生の踊りを見て、客席でいすの上の上に立って踊ったらいいんです。そうしたら、周りの人たちから拍手を浴びたんですって」と、繁子さんは笑いながら語る。

石井漢氏といえ、日本におけるモダンダンスの先駆者。繁子さんはその後、母のすすめで、石井氏の最も若い生徒として、4歳から10歳まで指導を受けた。幼い頃に親しんだダンスは、今に至るまで、繁子さんにとって心を解き放つ大きな楽しみとなっている。

「子どもの頃はピアノも習っていましたが、ずいぶんいろいろなことをさせてもらいました。今思うと、ありがたかったですね」

祖母、母、弟と暮らす家には、祖母の仕事の関係で常時50人ほどの若い女性が住み込んでいた。家事はそうした女性たちが担い、繁子さんが台所に入ろうとすると、「お嬢さん、邪魔だ

からどいていてください」と声がかかる。恵まれた「お嬢さん」の生活だった。

しかしその生活は、20歳にして遠縁にあたる栃木県足利市の大地主、大川家に嫁ぎ、一変する。終戦の翌年、昭和21年のことである。東京女子大学数学科を2年で中退して嫁いだ繁子さん。戦後の食糧難のさなか、東京から本家に来た嫁を、「米に惹かれて嫁いできた」と口さがないことを言う人もいた。

「でも、そういうところもちょっとはあったかも」と、繁子さんは軽やかに笑う。

「終戦になっても、大学は農作業ばかりで授業がないからつまらなくて。親同士が決めた結婚でしたけれど、それでも望まれて嫁ぐほうが幸せだろうと思ったんです」

東京から来てお高くとまっていると言われないうち、地域の清掃活動や集まりには積極的に参加した。こうして、地域に、そして婚家に溶け込もうと励む生活が始まったのである。

本家の嫁としての毎日は忙しかった。電気、ガス、水道が整った東京とは違い、当時の大川家は、つるべ井戸にかまどの生活。しかし、慣れない環境も言い訳にはならない。下宿する5〜6人の学生も含めた、10人前後の食事の支度など一切の家事が、嫁である繁子さんの仕事となった。

「結婚するまで、お米もといだことがなかったのに、井戸で水を汲んで、かまどで火をおこしている」と言われてうどん打ちも覚ええました。毎日忙しくて、つらいとか何とか考える余裕もなかったですね」

その頃、義母の大川ナミさんが、学ぶ機会がなかった女性たちのために「女子生活学校」を開設した。義母は当時には珍しく、下宿して東京の私立女子校に進学した才媛。進歩的な考えと人目を惹く美しい容姿の持ち主だった。自由学園の設立者である羽仁^{*}もと子氏に傾倒してお



繁子さん（左）と義母・ナミさん（右）。昭和48年、ナミさん叙勲のお祝いの日に

り、その教えを汲んで設立したのが「女子生活学校」だった。

「同じ年頃の女性たちが勉強したりピアノを習ったりしている傍らで、私は廊下の雑巾掛けです。かと思えば、ピアノの発表会には、『何か弾きなさい』と義母に言われたりして、よくまあ我慢してやっていたなと思います（笑）」

^{*}羽仁もと子……日本初の女性ジャーナリスト、思想家。キリスト教の精神を土台に、主



古民家と広大な園庭から成る小俣幼児生活団

35歳で突然、主任保育士に 厳しかった義母との絆

体的に生きる力を育む教育を実践する自由学園を夫と共に創設した。

「小俣幼児生活団」を開設したのも義母だ。繁子さんが今も主任保育士を務める保育園、

「ある時突然、つくるわよ、って言い出して。教養がある義母には、刺激のない田舎の暮らしが退屈で、何かやりたかったのじゃないね」
大川家約3000坪の地所を生かしてつくられた「小俣幼児生活団」は、築170年を超える大川家・母屋の古民家が園舎となり、小高い丘のある広大な庭がそのまま園庭となった。

保育園の開設には、保育士（当時は保母）の有資格者1名が必要だった。そこで義母が白羽の矢を立てたのが、次男を出産して間もなかった繁子さん。23歳のときである。

「義母に『資格を取りなさい』と言われて、次男をおぶって必死で勉強しました。皆さん、ピアノの試験で苦労されたようですが、幸い私は小学校の時から習っていたので1回で合格でき

ました」

資格は取ったものの、繁子さんはすぐに保育士の仕事に就いたわけではない。その頃はもっぱら家事、育児と、医師である義父の病院での看護助手の仕事に忙殺されていた。保育士として働くようになったのは、義父が医師をやめた後。35歳のときだった。クラス担任もしたことがないのに、義母の指示でいきなり主任保育士を務めることになったのである。

「実の子の夫でさえ、義母に名前を呼ばれただけで、『ハイ！ どうもすみません！』と謝るくらい、義母は絶対的な存在。私はもう、従うしかありませんでした（笑）」

後に、寝たきりとなった義母を介護したのも繁子さんだ。保育士として勤務し、園と自宅を忙しく往復する日々に、40歳の頃、義母の介護が加わった。夕食が済むと毎晩、義母の住まいに移動し、夜通し付き添う生活。家事、仕事、介護の3足のわらじの生活を7年間続けた繁子

さんだけが、義母の最期の時に立ち会えた。

「義母には、私の思いなどそっちのけで思いつくまにいろいろなことを求められたけれど、かわいがつてももらいました。年がいつてからは、『繁子、今日ほどの服を着たらいいかしら』と、私に選ばせてくれたりね」

慣れない土地での生活を受け入れ、さまざまな要求に一つ一つ応えてきた繁子さんを、ナミさんは認め、信頼を寄せていたのだ。

義母亡き後、理事の意向で生活団の園長は、繁子さんの次男で当時25歳の眞まことさんが継ぐことになった。眞さんは化学工学とデザインを学んできたが、保育は素人である。

「本人は全くの畑違いで、びっくりしたことでしよう。でも、私は眞が園長になって良かったと思っています。真面目な性格なので、自分には保育はわからないからと、ずいぶんあちこち出かけて勉強していましたから」

自分なりの幼児教育を追い求めた眞さんは、

やがて新しい保育を実践していく。子どもの自発的な活動を促し、世界的な起業家、政治家らを輩出しているモンテッソーリ教育。子どもも大人と対等と考え、一方的に評価したり命令したりしないアドラー心理学をベースにした接し方。日本ではまだ一般的ではなかった、そうした保育を積極的に取り入れた。

この保育が、自分で考え、選び、自分らしく生きていける子どもたちを育んだ。次第に、遠方からでも通わせたいという保護者、自分の子どもも通わせたいという卒園生が増え、小俣幼児生活団は、今や、全国から視察者が訪れる保育園となった。

一人暮らしの家で踊るダンスは自分だけの楽しみ

ただ、眞さんが取り入れてきた保育方針を実践するのは、今も、簡単ではないと感じていると繁子さんは言う。

「例えば、ポカッとお友達をたたいた子がいたら、つい『たたいちヤダメ』と言いたくなるものです。でもそうじゃなくて、なぜたたいたのか、まず、その子の気持ちを考えなくてはいいけません。それが、私には今も身につけていなくて。まだ努力が必要ですね」

繁子さんは今、生活団で2週に1回、音楽を用いて子どもたちの自由表現を伸ばすリトミックを担当している。リトミックとの出合いは、40歳を過ぎたから。音楽大学から届いた、リ



パワー全開の園児たちと体当たりで遊ぶ繁子先生

トミック研修の案内を目にして心惹かれたものの、20代の若者たちに交じって受講する勇気がすぐには出なかったという。

「でもやってみたら、子どもの頃、石井漠先生にダンスを学んだからか、意外なほどすんなり馴染めて。すっかり夢中になってしまったんです。今やっているリトミックも、子どもたち以上に私が楽しんでるのかも（笑）」

子どもの頃、舞台に触発されて踊り出した繁子さんらしさは、今もそのままだ。一人で暮らす家でも、気が向くとシヨパンやベートーベンの曲を流して、自由に体を動かし、踊っているという。

「それが、今の自分だけの楽しみ。もう、自分の好きにしてもいい年でしょう?」

嫁いできてからの繁子さんは、自分の意思でできることの方が少なかったかもしれない。そんな生活の中で抑えられていたさまざまな思いは、今ようやく解き放たれ、自由に表出されて

いるとも言える。

「もともと、私は決しておとなしい性格ではなかったと思うんですよ。義母の介護で義妹につらく当たられたときなんか、心の中で悪態いつたりね（笑）。でもね、久しぶりに会った女学校時代の友人が、あなた変わったわね、と言っています。丸くなったんでしょうね。そうやって変わることができたのが、私らしさなのかもしれません」

60年近く続けてきた保育士だが、望んで就いた仕事ではなかったと、繁子さんは言う。

「でも、今振り返ると、保育の仕事ができて本当に良かった。心からそう思います」

93歳となった今も、健康で、できることがあり、待っていてくれる人たちがいる。女性の生き方が制限されることが多かった時代も、自分を柔軟に変えながら、与えられた役割を一つひとつ果たしてきた繁子さん。だからこそ、そんな「今」がある。

『さあ、言おう』バックナンバーのご紹介

◎お問い合わせは広報まで 電話：(03) 5470-7751 メール：pr@sawayakazaidan.or.jp



2021年3月号

- 巻頭言「地域づくりは自分づくり」 清水 肇子
- 厨房男子（聞き手・堀田力）
「妻と一緒にやるのが当たり前」 中根 敏雄さん
- 活動の現場から おたがいさまネットみなみ（神奈川県南足柄市）
- 移住 悪くないですよ
人とつながり、遊ぶように生き、学ぶ（富山県氷見市）
- 連載2 老いの暮らしを創る 「人貧乏」 村田 幸子



2021年2月号

- 巻頭言「将来を見据えて、今、助け合いの土台づくりを」 清水 肇子
- 新連載・今風女子（聞き手・堀田力）
「真っ直ぐな思い、いくつになっても好奇心」 鮫島 純子さん
- 活動の現場から 地域の応援隊 和（高知県津野町）
- 移住 悪くないですよ
移住で一番大事なこと 人々と共にある生活（埼玉県長瀬町）
- 新連載1 老いの暮らしを創る 「子育て期より長い高齢期」 村田 幸子



2021年1月号

- 新春巻頭言「コロナ禍を乗り越えて共生社会を創ろう」 清水 肇子
- 新連載・厨房男子（聞き手・堀田力）
「みそ汁の味」 丹 直秀さん
- 特別寄稿「善意の受け皿」 弁護士 清水 勇男
- 活動の現場から 認定NPO法人ハーモニーネット未来（岡山県笠岡市）
- 移住 悪くないですよ 本当の豊かさとは（長崎県対馬市）



2020年12月号

- 巻頭言「国に緊急提言を行いました」 清水 肇子
- 新連載 移住 悪くないですよ
寒いけれどあたたかい、枝幸町の応援団長（北海道枝幸町）
- 活動の現場から 東灘こどもカフェ（兵庫県神戸市）
- 看取り・終末期を考える 裏を見せ、表を見せて…（最終回）
「『死』を想うきっかけとなった 新型コロナウイルスの襲来」 尾崎 雄

その他の内容 新地域支援事業・各地の動き／「地域助け合い基金」状況のご報告
「地域助け合い基金」助成先紹介／新・ひとりごと ほか



2020年8月特別号 さあ、言おう 特別対談 宮本太郎・堀田力

青写真を描くのは地方自治体 ～地域共生社会への道と難題～

当財団会長・堀田力が中央大学法学部教授・宮本太郎氏をお招きして、今後の日本における地域共生社会について話し合いました。今後の共生社会づくりに、どうぞご活用ください！

【主な内容】◆選ぶ道は地域共生社会 ◆地域共生社会への道筋と大きな課題



地域の将来像を共有し、自治会という 小単位で身近につながり助け合う

不働ヶ丘高齢者等生活支援プロジェクト ほっとらいふ（大阪府富田林市）

1960～70年代に郊外に誕生したニュータウンでは、急速な高齢化が進んでいます。そんな中、富田林市不働ヶ丘町では、「今は大丈夫でも、5年後10年後に果たして助け合いがなくなってやっつけてるのか？」という危機意識を地域で共有。自治会内に新たなグループ「ほっとらいふ」を立ち上げて、高齢者等の生活支援に取り組んでいます。いつまでもこの町で元気に楽しく暮らすために、みんなで知恵を絞ってつくり上げた、支援の仕組みや活動内容をご紹介します。（取材・文／城石 眞紀子）

5年後を想像するアンケートで
危機意識を共有し、活動創出へ

大阪府の南河内地域に位置する富田

林市。その南端にある不働ヶ丘町は、
大阪市のベッドタウンとして1970
年代半ばに山を切り開いてつくられた、
いわゆる「ニュータウン」だ。

坂の上にある閑静な住宅地に235
世帯630人が暮らし、最寄りの近鉄
長野線滝谷不動駅からは徒歩12～13分。
若い人なら歩いて行き来できる距離だ

がバスは走っておらず、店もコンビニが1軒あるだけ。駅の周りにも大きな商業施設や病院などがなかったため、車がなければ生活はできない。

入居開始当時は30〜35歳で、子どもが小学校に入る手前ぐらいのファミリーで住み始めた人たちが多かったが、現在の高齢化率は48%。2軒に1軒が高齢世帯で、一人暮らしの世帯も増えている。

こうした状況下にある不動ヶ丘町では、高齢化率が40%に近づく2014年3月、自治会内に「不動ヶ丘高齢者等生活支援プロジェクト ほっとらいふ」を設立し、町内の住民同士で助け合う仕組みをつくり出した。その経緯や取り組みについて、設立当初からのメンバーである、代表の播戸嘉明さん（79歳）、副代表の宮城治男さん（73歳）、書記の松谷由夏さん（61歳）から話を聞いた。

「当時、私と宮城さんは自治会の福祉

委員会で委員をしていました。その会議の席上で、最初に議題に上がったのは移動の問題でした。徐々に高齢化する地域で、ご主人を亡くされたり、運転免許証を返納されて自家用車を利用できなくなったり、病院や買い物の足を失って生活に不便をされている。地域で何とかしなければいけないのではないかと。そこで自治会長の梅田寛章さん（故人）が中心となって、13年4月



書記の松谷さん



副代表の宮城さん



代表の播戸さん

に高齢者支援を目的としたプロジェクトチームが立ち上がりました」（播戸さん）

プロジェクトチームでは、まずは町の現状を把握しようと、全世帯に住民アンケートを実施。目的を明確にするために、「移送支援の方法をイメージするためのアンケートです」といった説明の後に回答してもらった流れとし、家族構成や年齢、外出の目的などの必要な情報を取得できるように工夫。それに加えて、将来のことを具体的に想像してもらうために、「今、どういう方法で交通手段を使っているか?」「これから5年後どうなると思うか?」「移送支援や生活支援をしてくれる組織があったら参加したいか?」といった項目も設けた。

「その結果、『今はまだ何とか車が使えなければならない。5年後はわからない。そうなったときに、あの坂を歩いて行き来するのは無理かも...』『移動手段を

失ったら、不動産ケ丘から引越すしかない』などと、住民の間で危機意識を共有することができました。ほとんどの方がどうしようと考えていることがわかったことで、活動創出に向けての弾みもつきました」（播戸さん）

有識者や行政担当者との勉強会で移送支援の仕組みを確立

その後は、先行事例を学ぼうと、同じ大阪の寝屋川市で助け合い活動を展開するNPO法人「寝屋川あいの会」を視察。喫緊の課題でもある移動支援



活動拠点の自治会館

の形を検討するために、富田林市道路交通課主催の「これからの交通を考える」というシンポジウムにも出席。その席で、「公共交通が使えない地域での移送手段についても考えてほしい」と問題提起したのをきっかけに、道路交通課の呼びかけに応じて「地域交通を考える勉強会」を立ち上げた。そして、行政担当者や有識者、コンサルタント等を交えて不動産ケ丘の実情に合った移送支援の形態を検討していった。

「自分たちだけで何とかしようとするとなかなか前に進まないで、こうした機会を持てたのはとてもありがたかったですね。当初は福祉有償運送を考えたのですが、行政担当者と一緒に陸運局に話を聞きに行ったところ、事業の対象になるのは障がいのある方や要介護の方。免許返納者や交通弱者は当てはまらないと言われて白紙に。そこから有識者らにアドバイスをもらいながら、ああでもないこうでもないとい

んなで知恵を絞り、移送対価を利用者に求めない形態であれば、登録も許可も必要ないことがわかったので、市の子承も得て、不動産ケ丘ではガソリン代等の実費の範囲でボランティア運営する仕組みをつくり上げました」（宮城さん）

そして、検討内容がほぼまとまったところで、プロジェクトチームを発展的に解消。翌年3月に自治会内に高齢者等の生活を支援するグループの設立が承認され、ほっとらいふは活動をスタートさせた。

継続的に運営できるよう活動資金の調達も工夫

ほっとらいふでは、具体的にはどのような形で、移送・外出支援を行っているのだろうか。

「前日の17時までには電話かLINEで予約してもらい、隣接する市町村への通院、買い物のほか、銀行、美容院、

お墓参りなどの高齢者のニーズに応える送迎をドア・ツー・ドアで行っています」(松谷さん)

利用に際しては、事前に購入した利用券で支払う仕組みで、3キロ以内であれば100ポイント(100円)、5キロ以内が200ポイント(200円)と利用料はガソリン代実費相当。サービスを提供するボランティア(支援会員)にその2分の1を謝金として渡している。安全を確保するため、福祉有償運送運転者の1日講習を受け、ボランティア保険、事故に対する損害保険にも加入している。

「車輛は、自前で購入した中古の軽自動車、企業のCSR基金を使って購入した5人乗りの普通自動車の2台と、ボランティアのマイカーで行っています。私自身も送迎を担っていますが、マイカーのほうが運転に慣れているので安心なんです」(松谷さん)

現在、月に40件程度の利用があり、

「タクシーよりもずっと安い」「ありがたい」ととても喜ばれているそうだ。ただ、車を購入したり、維持したりするには費用もかかる。自主的な活動で公的支援を受けていないため、事業を継続するには活動資金の捻出も大きな課題だった。

「そこで会員制にして、利用会員、支援会員、賛助会員になっていただき、利用会員は年会費3000円、賛助会員には1口1000円からの寄付を募ったところ、毎年約100名から16、20万円が集まっています。また、子ども会がやっていた廃品回収の権利を半分もらえるように交渉したり、自分たちで資金を集める努力もしています」(播戸さん)

収入として大きいのは、何といても賛助会員からの寄付金だ。人口630人の小さな町で、約6分の1が賛助



利用券は、100ポイント券が10枚綴りで1000円

会員になったりしている計算になる。

「これは、事前アンケートで危機意識を共有したことで、明日はわが身」として、自分事として捉えてもらえた成果だと思っています。車を購入したり、保険やボランティアさんへの謝金もあり、事業は赤字なのですが、



活動資金づくりのための空き缶回収事業



賛助会員からの寄付などで購入した移送支援の専用車

賛助会員の皆様のお力添えで、ほっとらいふは育ってきたということですよ」

(播戸さん)

地域はひとつの大家族。 この町でいつまでも楽しく

このほかにも、「住み慣れた地域で元気で長生き」をモットーに、ほっとらいふでは日常生活困りごと支援、憩いの場支援、IT支援など、さまざまな活動を展開している。

「困りごと支援は、自力で行うのが難しいことを手助けするものです。例えば、高齢の女性から電球を交換してほしいという依頼もあるし、電気屋さんを呼ぶほどではないけれど、テレビの映りが悪いか、草引きや枝切りをしてほしいとの依頼もあります。先日は、トイレの便座を取り替えたいのだけれど、何を選んでいいのかわからないとの相談があり、予算に合うものを選んで取り付けてきました」(播戸さん)

憩いの場支援では、毎月第1・第3水曜日に買い物ツアーを実施したり、健康維持のためのノルディックウォーキング、サロン事業として料理教室、懐メロ体操、認知症予防教室などを開催。

「話し相手はテレビと仏壇、といった閉じこもりを防ぐために、コロナ禍以前は、毎週水曜日に拠点の自治会館に行けば、必ず何かやっているとiformを取ってきました。感染拡大防止のために今は月2回に削減し、飲食を伴う活動を抑えたり、カラオケも休止しています。少しでも集まる機会をつくるために、マスクをして体操をするなど、できることで工夫しています。IT支援については、病院に送って行って診察が終わって帰るときには連絡をもらわないといけないため、携



コロナ禍でもできる催しで交流。
(上・懐メロ体操、下・料理教室)



帯電話は必要です。購入のお手伝いや使い方の指導をしたり、私や私の夫はLINEやフェイスブックもやっていて多少はパソコンも使えるので、初期設定などのお手伝いもしています」(松谷さん)

不動ヶ丘では、夏の地藏盆と12月の餅つき大会という年2回の町内のお祭りがあり、住民総出でにぎわう。おでんや焼き鳥、焼きそばなどは400食、餅も3キロを14臼ついてふるまうとのこと、独立して町から出て行った子どもたちも孫を連れて帰ってきたり、

そこで同窓会をやつたりと、日頃からのつながりを培ってきた。

播戸さんは、それらの音頭取りを長年やってきただけに町の人たちからの信頼も厚い。ご本人は「趣味の延長みたいなもの」と謙遜するが、松谷さんは「皆さんがそうやって、町の人たちのために喜ぶことをやろうとしているのを、私も自治会の役員をして初めて知り、共感して発足時に仲間に加わりました。町の人たちは道で会えば互いにあいさつをし、全員が顔なじみというような関係。こんな地域はそうはありません」と言い、宮城さんは「一緒にやってきた前代表の梅田さんが昨年病気で亡くなり、その病床で引き継ぎもしました。最期まで町のことを気にかけていた彼の遺志に報いるためにも、しっかり活動を引き継いでいきたい」と話してくれた。

それぞれに思いはあるが、そこに共通するのは、「この町が好きだから、

いつまでもここで皆と楽しく暮らしていきたい」という願い。それは町の人たちも同じで、「一人になっちゃったけれど、まだここに住んでいいの？」と聞かれることもあるそうだ。賛助会員が多く集まっているのも、単に移動手段がなくなる危機意識だけでなく、こうして顔の見える関係を、長い時間をかけて地道につくってきたからではないだろうか。不動ヶ丘とは、町全体が一つの大家族のような地域なのだ。

運転ボランティアも高齢化している担い手が減ってきていることや活動資金不足など、課題も山積しているが、地域の課題を自分事として捉え、仲間をつくり、周辺を巻き込み、住みやすさにつなげてきた不動ヶ丘であれば、超高齢社会においても未来はきつと開けるに違いない。ぜひ、そのお手本となるような活動を続けていってほしい。

「住み慣れたこの町で元気に長生き」を合い言葉に、富田林市不動ヶ丘町の自治会内で活動する高齢者等の生活支援グループ。支援内容は、①日常生活困りごと支援（病院、銀行、役所などへの移送支援、ゴミだしや庭の清掃など高齢者が自力で行うことが難しいことの支援）、②憩いの場支援（買い物ツアー、食事会、介護予防教室など様々な企画での憩いの場づくり）、③IT支援（携帯電話、スマートフォン、パソコンなどの使い方支援）。会員制で利用会員（年会費3000円）、支援会員、賛助会員があり、利用券を発券して10分につき100円（100ポイント）、2分の1は支援会員へ渡す仕組み。

●連絡先／584-0064 大阪府富田林市不動ヶ丘町8-14(代表自宅)
電話 070-4387-0529 (事務局)

不動ヶ丘高齢者等生活支援プロジェクト ほつとらじふ

移住

悪くないですよ

第5回

「半農半X」で生きる

京田 貴央さん・甘奈さん（岡山県新見市）

アメリカ留学で培ったスキルを基に、帰国後は東京でキャリア

を積んだ京田貴央さん（48歳）と甘奈さん（49歳）。コロナ禍でテレワークや地方分散が

これまでになく進み、「都会人が地方に移住するのは定年後」という固定概念も過去のもの

となってきた今、40代半ばで地方に移住し、半農半Xエックスの生活を送るお二人の姿は、これか

らの日本を生きる私たちに一つの方向を示してくれています。

（取材・文／塩瀬 潔泉）

*半農半X……半分は農業で自給自足、もう半分は仕事も含め
自分がやりたいと思うことを追求する生き方。

○ 予期せぬ体験で早まった移住

京田貴央さんと甘奈さんは、高校卒業後の留学先だったアメリカ・シカゴで知り合った。小学校から12年間、語学教育が盛んなミッションスクー

ルで学んだ甘奈さんは、6年間の留学生活でさらに英語力を高め、貴央さんは「音」に関わる仕事を目指し、留学の後半には芸術大学で学んだ。2人は帰国後に結婚。東京でマンシオンを購入し、貴央さんは外資系企業でコンサートなどの仕事に

携わりキャリアを確立。甘奈さんは大手語学スクールに就職し、その後、アメリカ人の知人から日本で帰国子女向けの語学スクールを立ち上げるので手伝ってほしいと誘われて転職。新しい事業を興す仕事は大変だったが、とてもやりがいがあった。

一方で2人は、留学時代に地方で暮らす良さも実感していたという。

「アメリカでは、地方都市でもそれなりに刺激がある生活を皆が楽しんでいました。コンサートに行ったり、人との出会いもあつたり、皆が集まって楽器を演奏してみたり。私たちもいつかそんな暮らしができれば、と思っっていて、もともと農業にも興味がありましたので、休日には車で東京郊外の農村部に出かけて農業体験をしたり、農地を借りて野菜を育てたこともありました」（甘奈さん）

さらに、2011年の東日本大震災では、大災害が起きたときの大都市の脆さを体験。年を取ってからはずっと東京で生活することは難しいと思



京田甘奈さんと貴央さん

うようになった。仕事はその後も順調だったが、多忙を極める日々が続き、甘奈さんの心身は自分でも気づかないうちに悲鳴を上げていた。15年、甘奈さんは突然、パニック発作で電車に乗れなくなった。

「自他共に認める“元気印”でしたから、自分も周囲も『まさか』と。本当にショックでした」

甘奈さんは1か月の休みを取り、神奈川県の実家に通って母親の菜園で一緒に農作業をした。土に触れ、種を蒔いて植物を育てることが何よりも心身を整えてくれるとあらためて実感した。

「2か月後に仕事に復帰しましたが、また発症するのではという不安が付いてまわりました。パニックの発症はあまりにも大きな体験で、ほかにもこういう人たちがいるはず、移住して『こんな暮らし方もありますよ』ということを実体験として発信できたら、とも考えるようになりました」

農村での体験などから田舎暮らしへの思いは徐々に大きくなっていったが、このことを機に2人は移住に向けて具体的に動き出した。以前、農村を訪れたときに地元の人から「農作業は体力勝負。定年退職してからでなく早く始めたほうがいい」と言われたことも心に残っていた。希望する移住先の条件は、山間部で家から田畑が見え、隣の家も遠くに見えて、水のせせらぎが聞こえ、湧き水が汲めるところ。また、災害時を考慮して山から少し距離がある場所に建つ古民家、と明確だった。いろいろな地方を検討したが、東京有楽町の認定NPO法人ふるさと回帰支援センターを訪れた際、条件を伝えたところ同市をすすめられたことや、岡山県倉敷市出身の知人が、新見市は水がきれい

でもとても良い所だと言っていたこともあり、新見市が候補となった。2人は5日間岡山県に滞在し、

新見市も含めて22軒の空き家を見てまわった。その中で、甘奈さんが思い描いていたイメージそのもので「ビビッと来た」のが、現在の住まいだ。中に入ったときの心地よい感覚、風がよく通るのもいいと思った。2人もこの家が一番気に入り、帰る前にもう一度見ようと立ち寄ったところ、偶然にもかつてこの家に住んでいた男性が草刈りに来ていた。丁寧に接してくれたその男性と



甘奈さんと紀州犬のネナちゃん



京田さん夫婦の住まい

話をするうちに縁のようなものも感じ、この家に決めたという。天井を取り払って吹き抜けにしたり、たくさんあつた窓を寒さ対策として壁にするなどの改修をして、17年10月に2人はここへ移住。東京から一緒に来た猫3匹と、移住後に飼い始めた紀州犬の保護犬1匹と暮らし始めた。

簡単ではない自然との共存

都会では、外で飼われる犬をすっきり見かけなくなつたが、日が落ちれば外は真っ暗で人も出歩かなくなる地方では、物音や気配に反応してくれる番犬を飼うのが今でも普通だとのこと。「自然の中での暮らしは本当にいいものですが、その簡単ではないのも確か」と甘奈さんが言う通り、動物たちとの共存は、田舎暮らし



京田さん夫婦が暮らす唐松地区

しを知らない者には驚きだ。

「イノシシは大体夜中に来るし、猪突猛進なので電気柵で何とかありますが、サルは一度に20匹くらい来ます。賢くて、どうすれば食物を手に入れられるかと人間をずっと観察しているし、女性を見下しているのが男性が出て行かないとダメですね」と貴央さん。

貴央さんは、甘奈さんと一緒に農作業もしながら、東京2社、アメリカ2社と契約し、外資系企業で培ったスキルを生かしたビジネスコーチングやコンサルティング、音響関連ビジネス、翻訳などを移住当初からテレワークで行っているが、現在は新見市役所の移住促進の手伝いもしている。

「東京や海外ばかりではなく、地元である新見市にも何か貢献したいなと思って始めました」。

甘奈さんは、これまで試行錯誤しながらさまざまな野菜や果実を育てている。農作業は毎日午前と午後、昨年からは始めた米作りは「すべて手作業なので、かなり大変」としながらも、十分な収穫があつて自給できており、家族にも送ったりして



いる。繁忙期には、地域の農家で収穫作業を手伝うこともあるそうだ。

○ 小さなコミュニティでの助け合い

地域の人たちとの交流についても聞いた。

「ほとんど人の出入りが無い地域に東京から人が来るとなれば、住民の方々が不安になるのは当然です。こちらに来た当初はまず自分たちが何者なのかを知ってもらうことから始めました。僕らの場合は、引越してきて2日目に地域のまとめ役の男性が来てくれて、『何かあったら俺に言いな。昔ここに住んでたシゲルとは同級生なんだ』と（笑）。実際、いろいろなところに積極的に紹介してくれたりして、とても助かりました」

（貴央さん）

移住して間もない頃、家の屋根より高い木は何かあったとき倒れると危険だからと、近所の人が家の前の大木を切ってくれたことがあった。大変な作業にお礼のお金を渡したところ、「田舎ではそういうことはしない」と言われた。このときに

限らず、皆、いつも周りを気にかけて、自然に手伝い、道具を貸し借りして生活している。足りない物があれば、誰かが持つてきてくれる。都会ではあり得ないような自然を相手に、好きだ嫌いだの次元ではなく人間同士協力し、助け合わなければ生きていけないのが田舎での生活だとわかった。

「人の営み、コミュニティの暮らしとはこういうものなのか、と最近やっとわかってきた気がします」と甘奈さん。もし誰かが困っていたら、そのときは自分たちが手伝う。それでいいんだな、と思えるようになった。

昔から友人が多い2人は、自宅で移住者の交流会を行ったり、東京から来た友人と地元の人たちと一緒に招き、味噌作りや山で採った蔓草つづらでの籠編みなどを通じて交流を図っている。また、貴央さんが楽しそうに話してくれたのが、地元の人たちと始めた「移動式赤ちようちん」だ。地方への移住者からはよく、「気軽に飲みに行けないのだけが残念」と聞か、ここでもそれは同じ。そこで、貴央さんは知り合いの料理人が山で切つて



移动式赤ちょうちん（左奥）でにぎわう集落のイベント

きたヒノ
キで仲間
数人と持
ち運べる
カウンタ
ーを製作
。豊屋さん
に古い畳
を提供し

てもらい、畳席といす席もしつらえて行事のとき
に料理人の本格的な料理とお酒を出したところ、
有料だったがみんな大喜び。「自分たちが楽しい
と思うことをやってみたんですが、そのうち聞き
つけた人たちから『こつちでも赤ちょうちんやつ
てくれ』と声がかかるようになって、コロナ前ま
ではこのあたりで赤ちょうちんといえば僕らでし
た（笑）」

甘奈さんは週1回、保育園で園児に英会話を教
えている。英語を勉強するというよりは普段と違
うものに触れる機会をと考え、帰国子女のスクー

ルでの経験を生かし、英語で歌ったり踊ったりし
てもらっているが、最初は目も合わせなかつた子
が今では自分から甘奈さんのところに来て、とて
も楽しそうに過ごしているという。

「同じような考え方だけの集団にずっと居続ける
のはきついですし、自分と違うものを持っている
人に出会えればそれだけ視野も広がって、人は生
きやすくなると思うんです。違う文化を持ちなが
ら日本に定住する人たちも今後はもっと増えるで
しょう。また、自分たちの経験から、大都市と地
方の違いを子どもときから体感する機会として
農村留学などがもっと進めばいいなと思うし、今
後はそういった活動にも携われたら」と甘奈さん
は語ってくれた。そして、これからの日本人の生
活についても。

「この先、3人に1人は高齢者という時代が来れ
ば、いつでも病院にかかれるような社会ではなく
なるかもしれません。これからは、それぞれが自
立しながら自身の健康にもっと目を向けて生活す
ることが大事、と伝えたいですね」

老いの暮らしを創る

老後、誰とどこで過ごしますか

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

「老後、誰とどこで過ごすか」というテーマ

のエッセイ募集がありました。1996年のことです。高齢化が社会問題となり、さまざまな規範や社会のしくみの転換が求められている頃でした。募集したのはオパールネットワークという、中高年からのいきいきとした自立・自助の暮らしを提唱し、活動している団体です。当時はまだ、老いの暮らしは家族と共に自分の家で、と考えるのがあたり前でしたので、このテーマはかなり時代を先取りしたものでした。しかし今は多くの人が老後、誰とどこで暮らすかを模索するようになりま

した。

内閣府の調査では66%の人が自宅で暮らし続けたいと願っており、一方で住み替えを望む人は22%となっています。高齢期は、人の手を借りずに元気に暮らせる自立期から、看取りが視野に入ってくる終末期まで、折々に変化していきます。また住まいそのものもあちこち傷みが出てきたり、防災面で不十分であったりと老いの身体に見合ったものとはほど遠くなっています。

住み替えについて具体的に考えるようになるのは、ゴミ出しや買い物等、細々とした生





活上の困りごとが出てくる要介護予備軍とも言える時期かと思えます。まさかの時の不安も重なって、早めにケア付きホーム等に住み替えようかと真剣に考え始めます。しかし現在の施設はほとんどが要介護者向けです。将来の不安を早めに解消し、社会とも関わりつつ自分らしい暮らしをしたい、そう願う人たちが多くにもかかわらず、それに応えられる住まいがあまりにも少ないのが現状です。

評論家の故俵萌子さんは、元気なうちに有料老人ホームに入ろうと決めて、さまざまなかし結局翔べなかつたと、著書に書いています。その理由は、死ぬまで執筆の仕事を続けたいのに資料や本を収めるスペースがなく、あまりにも部屋が狭い、そして愛犬と一緒に入居できないということあげています。勿論、懐具合とも大いに関係しますが。

また医療や介護のサポートが常に必要な要

介護期の住み替えは、切羽詰まった家族が決めることになり、自分の望む暮らしは遠のいていきます。

老後、誰とどこで暮らすかと問われることは、自分のこれまでの生き方を見つめ、これから自分はどうな生き方・暮らし方をしたいかを、改めて考えてみるようになります。

「家とは」「夫婦や子どもとの関係」「地域や友人とのかかわり」「自分の資産」等、心の奥底にせまって自らに問わなければ、納得できる住まいは選べません。

「住まい」は、暮らしの基盤です。老いを重ねていく上での伴走者でもあります。自分はどこで、人生の幕をひきたいのか。80代を迎え、ひとり暮らししている私にとっても、老いの住まい選びは大きなテーマとなってきました。

あなたは「老後、誰とどこで暮らしますか」。



(むらた さちこ) 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退任後も高齢者問題の第一人者として活躍中。現在、江戸川総合人生大学「介護・健康学科」学科長。

「地域助け合い基金」状況のご報告

皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成している「地域助け合い基金」。3月15日までの状況をご報告いたします。

◎寄付受付額

185件 1023万1700円

このほかに当財団より6千万円を供出

◎助成実行額

399件 5301万2350円

(3月15日 当財団ホームページ開示時点)

コロナ禍で、さまざまな立場の人たちの孤立や困窮が次々と表面化し、これまで当財団が推進してきた、地域でのふれあい・助け合いの必要性が再認識されています。寄付者の皆様からのメッセージにも本基金への思いが

託されていますので、一部をご紹介します。

「少ないですが役に立てればと思います。みなさん元気で！」「昔ながらの思いやりある助け合いが復活して、老いも若きもごちゃまぜの支えあいが実現しますように」

誰もが幸せに暮らせる地域共生社会をつくるために、本基金へのさらなるご理解・ご寄付を今後ともよろしくお願い申し上げます。

(事務局長・内田)

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、QRコードもご利用ください！



クレジットカード決済ページ



財団ホームページ内基金関連ページ

基金に関する
ご意見・お問い合わせ

＜地域助け合い基金担当＞

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：mail@sawayakazaidan.or.jp

「地域助け合い基金」で コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

皆様からのご寄付をお待ちしています！

1. 寄付金の使途

共生社会を推進するため、助け合い活動の支援に活用させていただきます。

助成の対象は、地域で暮らす人同士の助け合い活動であり、新たに団体を設立する場合のほか、新たに活動を広げる場合やコロナ禍に対応して特別な助け合い活動を行う場合も含まれます。

高齢者、子ども、認知症、障がい、生活困窮の方々、刑余者、外国人、ケアラの支援ほか、分野は問いません。ただし、日本国内の活動に限ります。

本基金は、支援したい市区町村（区は東京都の特別区）をご指定いただけます。

2. 税制上の優遇措置

当財団にいただいたご寄付は、税制上の優遇措置の対象となります（当財団発行の領収証が必要となります）。

3. ご寄付の方法

(1) 銀行振込によるご寄付

三井住友銀行 浜松町支店（普通） 口座番号 7859452

三菱UFJ銀行 浜松町支店（普通） 口座番号 0095446

（口座名義 ※いずれも同様）

公益財団法人さわやか福祉財団 地域助け合い基金

※銀行お振り込みの場合は、送金者の情報がカタカナ表記のお名前のみとなるため、当財団発行の領収書が必要な場合や地域の指定をご希望の場合は、お手数ですが「寄付申込書」を当財団宛お送りください。当財団へのお電話でも承ります。

(2) 郵便振替によるご寄付

（口座記号番号） 00110-7-709627

（加入者名） 公益財団法人さわやか福祉財団

※通信欄に、ご指定がある場合の市区町村名（区は東京都の特別区）と、ひと言応援コメントなどをご記入ください。※手数料不要の払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

(3) クレジットカードによるご寄付

36ページのQRコードもしくは当財団ホームページよりお申し込み下さい。

助成応募については、当財団ホームページをご参照ください。

「寄付申込書」「パンフレット」なども、ホームページからダウンロードできます。

<寄付・助成のお問い合わせ>
地域助け合い基金担当

電話：(03)5470-7751 FAX：(03)5470-7755

メール：mail@sawayakazaidan.or.jp

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様からのご寄付を原資として、全国の助け合い活動を支援している「地域助け合い基金」。直接会うことが難しい今、つながり続けることで孤立を少しでも防ぎようと活動している3団体をご紹介します。

山梨県中央市

オンラインで授業再開 学習、メンタルともにサポート

NPO法人未来への扉

助成金額 20万円

未来への扉では、在住外国人向けの日本語教室、またブラジル人学校での児童・生徒への学習指導を行っています。コロナ禍で休校していた在日ブラジル人学校も外国人向け日本語教室も再開したものの、スタッフ、生徒、保護者が感染リスクへの不安を常に抱えていることから、衛生環境

を整えるための保健衛生用品購入、健康診断の実施費用、今後、再度休校が余儀なくされる事態に備えてのオンライン授業の環境整備費用として、本基金の助成金を活用されました。

昨年夏期休暇明け、今年の冬期休暇明けには、外出機会が増えた



オンライン授業の様子

家庭もあるであろうことから、感染拡大防止のためオンライン授業を実施。家庭でオンライン環境が整わない生徒もいることから、タブレット端末を購入して貸し出したことにより、公平な学習機会を提供することができたそうです。また、通信機器やネットワーク環境も再整備したことでスムーズで快適な授業進行を行うことができた、との報告をいただきました。

オンライン授業を行うことで、生徒たちの学びの機会を損なうことなく、安心して学ぶことができる環境を提供できたと同時に、画面越しでも講師・生徒たちが顔を合わせつながりを持つことでそれぞれ様子をうかがうことができ、学習面でもメンタル面でも十分なサポートができた、とのことです。

兵庫県宝塚市

高齢者の閉じこもり、フレイル予防のため サロン活動再開

花屋敷つつじが丘自治会

助成金額 13万5000円

花屋敷つつじが丘自治会は、集会所を高齢者の交流の場

として、住民相互の連携・連絡、環境美化向上活動、親睦交流活動、防犯・防災・交通安全、福祉活動を行っています。

また、地域の生活支援コーディネーターともつながり、サロンの実態把握アンケートへの協力や、ネットワーク会議の場

での情報共有等にも取り組んできました。

昨年5月の県の自粛要請に基づき地域のサロン活動を中止していましたが、6月に要請が解除されたことを機に、高齢者の閉じこもり防止、フレイル発生予防として利用者に注意喚起しながら安心して再開できるよう、本基金の助成金を使って、集会所のコロナ対策として消毒除菌等の衛生用品、飛沫感染対策、掲示板設置、業務用扇風機、リモートワーク機材を購入しました。

今後の展開として、「自治会離れが話題になっていますが、これからの時代は地域活動の中核としてより重要性が



再開したサロン活動

増すと考えています」「まずはこの地域に食堂を立ち上げて住民の交流を活発にできる場所づくりを目指します」ということです。

熊本県嘉島町

「つながり続けることが大事」 フードパントリーや声かけ活動を実施

ハンズハンズ

助成金額 10万円

ハンズハンズでは、配食・会食サービス、一人親家庭や生活困窮者支援、子どもの昼食サポート、高齢者見守り支援等の活動を行っています。昨年は、長い間行われていなかった地元のお祭りを復活させようと、関係者に働きかけ実行委員会を立ち上げた矢先、新型コロナウイルスが拡大。お祭りは延期となりました。

コロナ禍でも、声を上げずに頑張っている人々があり、行政としては給付金支給で公助しているものの、取り残されていく人たちを孤立させ最悪の状況になってしまいうことも予想されることから、「まずはつながり続けていくこと

が重要」と、活動を継続してきました。

本基金の助成金は、配食の食材費、生活消耗品。パントリー費用、昨年末の年末生活応援品代として活用。昨年10、12月に22回のフードパントリー・生活消耗品。パントリーを実施し、520人の利用があったということです。

その結果、一人親家庭の方々ととの関係が密になり、SNSで30〜40人と会話ができています。コロナ禍での不安な気持ちを吐き出してもらうことで、少し心が安定していらつしやるように感じる、とのこと。高齢者は感染リスクが高いため積極的な声かけはできませんが、宅配をしたり、年末に少数の方々に声をかけたりしました。「つながつているということを感じていただけることが大事だと思います」との報告をいただきました。



フードパントリーでの
食料配布の様子

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

いきがい

ふれあい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。
特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

● 新地域支援事業・助け合いの地域づくり

北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

さわやか活動日記（抄）

2021年度

実施事業・プロジェクトの紹介



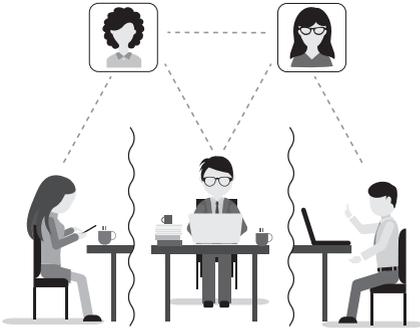


北から
南へ

新地域支援事業・ 各地の動き

(2021年2月1日～28日)

- 全国各地で、
推進の支援をしています
- 活動の一部を紹介しています



住民に参加を呼びかける
(住民対象のフォーラム、勉強会等)

長崎県

18日／長崎県主催の生活支援コーディネーター等、仕掛ける人々を対象としたテーマ別実践研修会が開催された。テーマは、有償ボランティアと移動支援。当財団は有償ボランティアのアドバイザーとして協力した。

新地域支援事業がスタートして6年目。同県内は生活支援コーディネーターらがバックアップして助け合いづくりが始まってきている。この研修会は、活動を立ち上げたリーダーとバックアップした生活支援コーディネーターが組んで、共に話し合いながら立ち上げたプロセスを苦労話も含めてそれぞれ紹介し、質疑応答で理解を深める内容。生活を支える有償ボランティアは、高齢化と人口減少が進むどの地域でも安心して暮らし続けるために必要な仕組み。身近な県内の取り組みを具体的に

知り、生活支援コーディネーターらが情報交換しながら、各地での普及につながるようにしてほしい。移動支援は、NPO法人全国移動ネットの河崎民子副理事長が助言された。(鶴山)

生活支援コーディネーター・ 協議体と連携

板橋区(東京都)

26日／板橋区で、生活支援体制整備事業に係る「支え合い会議オンライン交流会」が開催され、当財団も協力した。本企画は1月に続く2回目として、協議体構成員の要望で実施が決まった。財団からは、助け合いの自由度に焦点を置き情報提供。板橋区では住民が主体的に本事業に参画し、助け合いを広げる取り組みを進めている。

(長瀬)

阿賀野市(新潟県)

22日／阿賀野市で協議体勉強会が行われ、当財団も協力。2016年に大づかみ方式勉強会で財団も2層づくりに

関わった同市は、ニーズの掘り起こしや助け合い勉強会を重ね、2年間かけて2層4圏域に拠点となる居場所を立ち上げてきた。それから5年が経ち、2層協議体メンバーの入れ替わりもある中、次第に壁にぶつかったと地域包括支援センターの担当者、山崎あい氏から相談があり、協議体全体会に参加して今後の取り組みのきっかけになればと参加した。

当日は最初に山崎氏から同市の目指す地域像とそれを実現するためのこれまでの取り組みについて説明。続いて財団から「『支え合いの地域づくり』これからの取り組みの目指すところ」として講演した。「目指す地域像が進化してきたことを確認し、拠点の居場所ができたことで見えてきた『生活支援や移動支援などが必要』『多様な居場所が各地にあるといい』『もっと多くのの人たちに知ってもらう必要がある』などの声を生かすには、何から取り組んでいけばよいか考えよう」と呼

びかけ、有償ボランティアの基本を伝えた。「目的を再確認できた」「まずはやってみることが大切」などの前向きな声も上がった。今後に期待したい。(鶴山)

鯖江市(福井県)

8日/鯖江市では、公民館(10圏域)に第2層生活支援コーディネーターを配置している。しかし地域差もあり、なかなか活動創出に至っていない地域も見られる。今回は各地域の課題を持ち寄り、意見交換することで情報共有と解決のヒントを得るため、同市主催で研修会が開催された。最初に財団より、生活支援コーディネーターから事前に提出された課題項目も盛り込んだ説明をリモートで実施、後半はそれらについて意見交換を行った。(高橋)

美浜町(福井県)

25日/美浜町では、住民の助け合い活動参加へのきっかけづくりとして4月1日から「地域あいあいポイント事業」を始める。本事業は協議体が話し

合いを重ねてきたもので、今回は地域が助け合いの意義を理解し協力していくよう、ボランティア受け入れ施設等を対象に関係団体研修会が開催されたもの。行政からのポイント事業の説明に続き、当財団からは活動参加による介護予防の効果だけでなく、生活のいきがい・やりがいの創出について動画も交えて紹介した。今後は市民にも広く周知を行い、助け合いを広げていく予定である。(高橋)

生活支援コーディネーター養成研修等に協力

群馬県

17日/群馬県西部ブロックの生活支援コーディネーター連絡会がオンラインで開催され、当財団も協力。今回は翌月に開催を予定している企業との協働に関する勉強会について意見を交換した。企業側の提案を待つのではなく、協議体と共に住民の目線で可能性を探ることが重要として、当日の論点を整

理した。

(長瀬)

埼玉県

15日／埼玉県主催の「生活支援コーディネーターブロック別連絡会議（北部ブロック）」が開催され、生活支援コーディネーター19名が参加、当財団もオブザーバー参加した。この連絡会議は生活支援コーディネーターが主体的に企画・運営に関わって、生活支援コーディネーターによる生活支援コーディネーターのための研修会として行われており、生活支援コーディネーター同士のネットワークづくりにもなっている。

ブロックによってテーマは異なり、この日はコロナ禍での取り組みについて、できていること、できていないこととの情報を共有。全体共有の時間を多く取り、発表を参考にして各自の取り組みのヒントとなるように配慮した。進行役の深谷市第1層生活支援コーディネーター萩原祐輔氏から「『できない』ではなくできることを考えていこ

う」と呼びかけ、財団からもできるところで工夫しながら活動している他市町村の事例を紹介した。

(岡野)

25日／埼玉県では、毎年度末に「埼玉県地域包括ケアシステム総合支援チーム活動報告会」として、総合支援チームの活動（介護予防、生活支援、地域ケア会議、在宅医療介護連携）のそれぞれについて、総合支援チームおよびチームが支援した自治体から取り組み報告を行っている。例年、県内自治体から300人以上が集まっているが、今年度はコロナ禍のため、報告の動画を撮影し、市町村が視聴する形式での開催となり、当財団もこの日、総合支援チームのメンバーとして報告動画を提供した。

今年度は、協議体や住民勉強会等が相次いで自粛となったことから、財団が担当する市町村支援は、電話、メール、オンライン中心となったが、積極的に情報提供、アドバイスに努めた。コロナで活動が止まってしまい悩んで

いる生活支援コーディネーターも多く、「コロナ禍での他市町村の活動の情報提供等は大変ありがたい」などの声が聞かれた。今後も積極的に支援を行っていききたい。

(岡野)

富山県

15日／「生活支援コーディネーターフォローアップ研修」が富山県主催で開催された。今回は、コロナ禍でもつなごうを切らさない取り組みと、つながりから生まれる助け合いの推進に向けて生活支援コーディネーターが担う役割について、講義（財団）とワークショップを行った。

県内の生活支援コーディネーター、行政担当者等は会場参加とリモート参加に分かれていたが、富山国際大学の相山馨准教授がコーディネーターとして会場から取りまとめ、リモート参加も含め活気あるグループワークが行われた。

今後は、県が各地の実践での課題についてもフォローしていくことで、県

内の取り組み推進を目指していく。

(高橋)

**地域包括支援センター関係者
との勉強会に協力**

渋谷区（東京都）

22・24・25日／渋谷区全域の地域包括支援センターの関係者に向けた生活支援体制整備事業の勉強会が実施され、情報提供で当財団が協力した。渋谷区では、本事業における住民主体の実践をさらに進めるべく、20年度に新たな戦略の検討を行ってきた。

都市部特有の課題などを関係者が共に認識し合いながら、足並みを揃え、新年度から新計画の実践を進める。

(長瀬)

(本稿は、岡野貴代、高橋望、鶴山芳子、長瀬純治)

情報紙

助け合いの仕組みづくりをさらに進めよう

『さあ、やろう』
vol.15

生活支援コーディネーターと協議体の取り組みを考える情報紙『さあ、やろう』。新地域支援事業に携わり、地域における助け合いの仕組みづくりを進めている方々の参考となる記事を掲載し、全国の関係者の皆さんに頒布しています。また、財団ホームページからもダウンロードできます。

ぜひご活用ください。

[vol.15目次]

- * 特集・対談 共感から信頼し合う人間関係へ ～地域共同体の再生～
- * 「いきがい・助け合いサミット in 神奈川」ご案内
- * 特集・鼎談 2040年の地域生活を支えるために、いま、何をなすべきか
- * 緊急提言特集
- * 動画『NEXT～心と心をつなぐ工夫と取り組み～』
- * 「地域助け合い基金」状況ご報告
- * Topics コロナ禍の中でも助け合いを広めるために ほか

【お問合せ】電話 (03) 5470-7751 メール post@sawayakazaidan.or.jp



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2021年2月1日～2月28日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日とずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人(74件)

(都道府県別50音順)

北海道	橋口 栄彦	安齋 昌敏	松浦 隆史	石川 隆	谷 仙一郎
木下 淑子	山下 多鶴子	石毛 英夫	宮沢 邦子	吉村 久美子	松浦 正和
沢田 壮兵	栃木 忠雄	伊藤 博行	渡邊 一衛	長野 庸子	大阪府
寺上 洋子	菅野 忠雄	佐藤 悦子	神奈川 県	筒井 庸子	寺井 正治
丸藤 競	山田 智子	増元 秀雄	赤松 高明	水沢 芳夫	安居 正
渡部 保代	群馬 県	三勢 光俊	太田 昭	静岡 県	渡辺 浩一
宮城 県	小山 範之	森田 剛	木村 利雄	朝田 充	兵庫 県
佐藤 義明	埼玉 県	東京 都	小嶋 英雄	榛葉 さよ子	井上 雅晴
渡辺 典子	石井 初枝	江本 晴行	近藤 栄子	樋口 広寿	奈良 県
山形 県	小野内 智子	小野 島一	近藤 清晴	古橋 和子	山出 哲史
高梨 英子	斎藤 敬基	金野 京子	菅原 敬子	愛知 県	広島 県
福島 県	中崎 朱美	仲田 明子	鶴山 祐子	加藤 さつき	黒田 不二男
須貝 一男	西野 優子	野見山 國光	芳賀 節臣	関戸 進	島本 照久
茨城 県	千葉 県	原島 敏子	丸山 賢吾	三重 県	福岡 県
			渡辺 政勝	片山 幾代	山口 県
			富山 県	三宅 修司	追中 富美子
			安土 宗孝	滋賀 県	徳島 県

さわやかパートナー法人(12件)

(50音順)

麻野 信子	佐賀 県	木ノ下 素信
愛媛 県	西田 京子	沖縄 県
田中 徹	大分 県	上地 武昭
アシードブリュール株式会社		
エバオン株式会社		
近畿労働金庫		
草野産業株式会社		
一般財団法人住友生命福祉文化財団		
公益社団法人		
生命保険ファイナンシャルアドバイザー協会		
NPO法人地域サポートの会さわやか高知		
株式会社榎屋		
株式会社日立物流		

マクセルホールディングス株式会社
社会福祉法人緑成会特別養護老人ホーム緑の郷
NPO法人隣の会

一般で寄付（7件）

（50音順）

岩渕 由紀子（1万円）
小田 新夫（1万円）
阪上 智恵子（1万円）
西野 優子（1万円）
ネットワンシステムズ株式会社（2420円）
一般財団法人年金住宅福祉協会（3百万円）
有限会社ヤマダ（3万円）

地域助け合い基金で寄付（6件）

（こ寄付日付順）

加藤 明（1万円）
ハヤカワ トシヒコ（1万5000円）
中平 由起子（5万円）
匿名希望（1万円）
澤邊 みさ子（3万円）
匿名希望（2万円）

9月開催のいきがい・助け合いサミット in 神奈川にお役立てください

いきがい・助け合いサミット in 大阪 『助け合い大全'19』

2019年9月に開催した「いきがい・助け合いサミット in 大阪」のすべてを収録した『助け合い大全'19』です。

サミットでの全体シンポジウムと各分科会における発言要旨をまとめた『パネル編』、ポスターセッション出展の全作品を掲載した『ポスター編』、そして『提言編』を3冊セットで頒布しています。9月1・2日開催の「いきがい・助け合いサミット in 神奈川」の参考資料としてもご利用ください。

お申し込みは当財団まで → mail@sawayakazaidan.or.jp

1セット2,000円（税込み）送料別 ※3冊セットのみでの頒布となります。

【助け合い大全'19 提言編 目次】

- いきがい・助け合いサミット in 大阪の意義と特徴
- 全体シンポジウム発言要旨
- 分科会1～54
提言／登壇者／議事要旨
- ポスター展
- いきがい・助け合いサミット in 大阪を振り返って



さわやか活動日記(抄)

〈2021年2月1日～2月28日〉



情報・調査事業

調査政策提言
プロジェクト

「広がれ ボランティアの輪」

勉強会開催

【2月18日】

当財団も幹事団体に
なっている「広がれボ
ランティアの輪」連絡
会議では4つのプロジ
エクトを展開しており、
当財団は勉強会プロジ
エクトチームの一員で
ある。

昨年度はコロナ禍の

影響で、予定していた勉強会を中止せざるを得なかった。しかし、今年度は初のオンライン方式で、実践報告とブレイクアウトルームに分かれてのグループ討議を行った。実践報告は、①「子どもの学び・体験学習に関わる実践」と題して、神奈川県海老名市教育長および御殿場にあるYMC A 東山荘から、子どもの学び、自然体験は子どもの大切な成長のステップであり、自分が人のために役立って

いるという教育が重要であるという考えの下、コロナ禍においても子どもたちへの野外教育活動を実践している様子、②病院ボランティア協会から「コロナで変わる病院ボランティアのいま」と題して、ボランティアが感染するリスクと、ボランティアから病院・患者さんへ感染するリスクの双方に細心の注意を払いつつ行っている活動の様子、③ピースボートから「新型コロナウイルス感染拡大における複合災害の影響」と題し、昨年7月の熊本豪雨被害への支援状況を報告してもらった。いずれもコロナ禍の中でも周囲の理解・協力を得ながら感染防止

を徹底し、その時々でどんな活動が行えるかを模索しながら活動している様子が発表された。

同連絡会の上野谷加代子会長も冒頭から最後まで参加して、一つひとつのブレイクアウトルームものぞいてくれた。また、最後のあいさつで「困難な状況下においてもつながりによって生み出される希望が大切。力を抜いて前進していきましょ

う」とのエールが送られた。

参加者約100名。今回オンライン方式を取り入れたことにより、全国から参加いただくことができ、アンケートでも「さまざまな主体の活動がつながっていくためにも、このような勉強会はとても大切だ」「知ることでも物の見え方が変わる。視野が広く持てるようになった」等の声が寄せられた。(上田)

所 事 だ より

● コロナワクチンの接種も始まり、桜の開花も早く気分も前向きになってきた新年度。9月の神奈川サミットの準備にも一段と拍車がかかってきた。5月中旬には申込みも開始されるため、よりわかりやすくご案内できるように頑張ります！ライブ配信もありますので、ご参加をお待ちしています。

2021年度

※2021年3月17日現在の予定。

金額の数字は各事業の直接事業費予算額、1万円未満は省略しています。

実施事業・プロジェクトをご紹介します。

2021年度の実施事業・プロジェクトの予算が決定しました。

新年度も、新しいふれあい社会づくりに向けて、財団一同邁進いたします。

皆様のご支援を、どうぞよろしくお願い申し上げます。

ふれあい推進事業

5億2627万円

- ①生活支援コーディネーター・協議体支援プロジェクト
- ②ブロック等との協働戦略プロジェクト
- ③助け合い拠点づくりプロジェクト
- ④ふれあいの居場所推進プロジェクト
- ⑤立ち上げ支援プロジェクト
- ⑥復興支援プロジェクト

社会参加推進事業

4135万円

- ①社会人地域参加推進プロジェクト
- ②子ども育成支援プロジェクト

情報・調査事業

1億3855万円

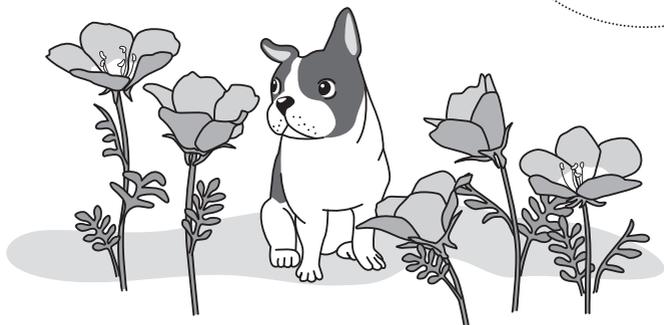
- ③スポーツふれあいプロジェクト
- ④民間支援創出プロジェクト
- ①情報誌発行プロジェクト
- ②統括広報プロジェクト
- ③調査政策提言プロジェクト
- ④地域助け合い情報活用研究プロジェクト

収益事業

1751万円

- ①不動産賃貸等事業

みんなの広場



定年後の専門学校
いいと思います！

加藤まゆみさん

神奈川県

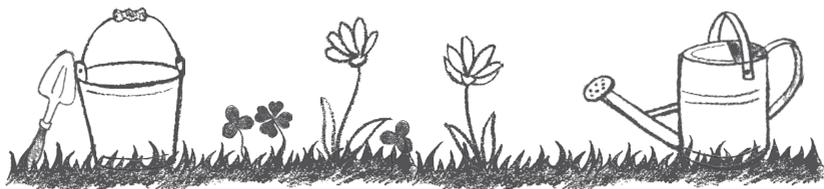
「定年退職後の専門学校があったら…」
という地域包括支援センターの方からの
投稿（本年1月号）がありました。私
も同感です。

私も包括で就労していますが、定年退
職後、家に引きこもりがちになり他との
交流もなく過ごしている男性が多いと感
じます。年金受給説明のときに、ボラン
ティア活動や趣味活動でどんどん活躍す
るように説明してほしいと思います。

また、災害時の救護要員としても活躍
できるよう、総合的な専門学校があると
本当に良いと思います。

よう

死ぬまでやりたいことをやりまし





『さあ、言おう』投稿募集

あなたの意見を社会へ生かそう

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる
問題提起型情報誌です。

ぜひ皆様の声をお寄せください

『さあ、言おう』では、取り上げたテーマに対する読者の皆様からのご意見・ご感想、あるいは普段気になっているテーマに基づいた体験談や提言などを随時募集しています。

常設テーマ

- 地域の助け合い活動について
- 助け合いの地域づくりについて
- いきがい、社会参加について
- 居場所や地縁組織、NPOの活動について
- 新地域支援事業について
- 生き方について など

投稿の方法

- 字数や回数制限はありませんが、掲載にあたっては誌面の都合上、編集要約する場合があります。あらかじめご了承ください。
- 一般投稿は形式は問いません。本誌添付の投稿ハガキなどもご自由にご利用ください（原稿はお返しできません）。
- 投稿は、事情が許す限り本名でお願いします。
ただし、掲載時には匿名、あるいはペンネームの使用も可能ですので、その旨お書き添えください。
- 投稿時には、お名前ほかに、ご住所、連絡先お電話番号をご記入ください（内容により質問させていただく場合があります）。性別、年齢もよろしければお書き添え下さい。大変参考になります。

送付先

〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX (03) 5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp



私たちはふれあいあふれた地域づくりを支援しています

さわやか福祉財団の活動をぜひご支援ください。

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の控除対象となります。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の控除対象となります(所得税の寄付控除額の上限は所得の40%-2000円)。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※手数料不要の専用用紙をご用意していますので申し出いただければご郵送します。

*いずれもお問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。(mail@sawayakazaidan.or.jp)

表紙絵

はり絵・池田げんえい



「土手の桜」

編集後記 ●さわやか福祉推進センター設立当初より絶大なご支援をいただいている清水勇男さんからの寄稿を皮切りに、今年30周年となる当財団の歴史と人を5回にわたってお届けします(P4~)。●「今風女子」第2回は、93歳の今も現場で主任保育士を務める大川繁子さん(P14~)。●「活動の現場から」は、10年後を考えて皆で問題意識を共有し、自治会での助け合いを創出した「ほっとらいふ」です(P22~)。●「移住 悪くないですよ」は、自然の中で心身の健康を取り戻し、半農半Xの生活を送る京田さんご夫婦です(P28~)。

助け合いを
広げよう!



坂本 昭文

人は誰でも幸せになる権利があるんだよ

皆が同じでなく一人ひとりが違っていいんだ

皆に持ち場と出番が用意されている人生なんだよ

かけがえのない大切な人生、

ゆっくり確かめながら歩くんだ

万一、失敗してもやり直せばいいんだよ

困ったときには誰かに相談すればいいんだ

自分一人で悩んでいても始まらないからね

君の近くに役に立ちたいと思ってる人が必ずいるよ

君の悩みを、さあ、言おうよ、勇気を出して



● いくらの郷所長

ニートや引きこもり青年の社会復帰の支援を行っています。豊かな環境の下での農林業作業等で、元気な心と体を作って行くと、自然治癒力で見える見ろうちに復活する若者に生きがいを感じています。

いくらの郷ホームページ：<https://ikuranosato.jimdofree.com/>

（お楽しみ） 4月号

通巻332号 2021年4月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
イラスト すずきひさこ
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

大好評

動画『NEXT ~心と心をつなぐ工夫と取り組み~』

ご活用ください!

コロナ禍にあっても、アイデアと工夫でみんなが笑顔になれる活動を紹介している当財団制作の動画「NEXT 心と心をつなぐ工夫と取り組み」(各8分程度)。皆様から大変ご好評いただいています。コロナの時代における助け合い活動のヒントとして、生活支援コーディネーターの勉強会のツールなどとして、ぜひご活用ください!



第1弾

奈良県生駒市



あなたの「元気」を届けよう
プロジェクト

第2弾

静岡県袋井市



出前居場所・青空居場所・
我が家のごはん届けます

第3弾

大阪府門真市



こんな時こそ地域の力で、
ゆめ伴プロジェクト

第4弾

新潟県新潟市



受け身にせず
「みんなで守ること」で活動再開

第5弾

岡山県倉敷市



つながる回覧・
マスクプロジェクト

第6弾

神奈川県鎌倉市



食を通じた居場所(みんなたべ)・
フードパントリー

動画は、当財団ホームページでご覧いただけます。

<https://www.sawayakazaidan.or.jp/movie-next/>